対談：山間に図書館をひらくこと

これからの「公共」
―「山間に図書館をひらく」ことを手がかりに―

青　木　真　兵

対談のタイトルは「山間に図書館をひらくこと」でしたが、時間が限られていたため、今回は「図書館を開くこと」のお話が主だったかと思います。

僕たちが東吉野村という山村で人文系私設図書館ルチャ・リブロを開設した背景には、いわゆる新自由主義的な政策へのリアクションという側面があります。直接のきっかけは2000年代後半、私が大阪府下の大学で大学院生だったころに遡ります。当時大阪府知事だった橋下徹は、多くの文化事業や文化施設をコストカットという名目で縮小することを次々に決めていきました。その中には来館者が少ないといった理由によって、国際児童文学館が閉館、中央図書館に移転するというものがありました。

新自由主義的な政策では、儲かるか儲からないかといった市場原理によってその価値が判断されます。つまりその世界観ではすべてを商品とみなし、消費者に選ばれれば価値があるし、選ばれなければ価値がないと考えるのです。本来、社会における公共部門はそのような消費者ニーズによって左右されない部分を担っているはずです。それは道路や水道、福祉、教育、医療など、広い意味でのインフラを指します。そもそもインフラの価値は儲かる、儲からないといった経済原理で測るものではなく、人々が生きる上で不可欠なものだからインフラは存在するのです。そのような意味で、僕は図書館をインフラの一つだと思っています。

当たり前ですが、図書館の価値は貸出点数や来館者数で決められるものではありません。むしろここ数年の流行やニーズなどによって左右されないものも収蔵、保管し活用するのが図書館です。大阪維新の政治やその支持者の言説を見聞きすると、図書館は本がタダで読めてくつろぐことができ、タダで本を貸し借りできる空間程度の認識しかありません。しかも国際児童文学館の場合、通常の図書館とも異なる点がありました。『おおさかの街』によると、児童文学館の中央図書館への移転によって二つの機能が失われたといいます。一つは総合資料センターとしての機能。もう一つがこどもの読書活動支援センターとしての機能です。ここでは紙幅の都合上深くは言及しませんが、国際児童文学館の廃館・移転は児童書の収集や保存だけでなく、研究活動や司書の育成の場も失われたことを意味しました[1]。

今回、シンポジウムで対談させていただいた古川さんは、さまざまな経緯があって行政を頼るのではなく、NPOという形で図書館を立ち上げ、継続的に運営されて来られました[2]。僕と古川さんは「図書館は公共的なものである」という点については同意しています。ただ違いがあるとするならば、ルチャ・リブロは自宅を開放している一私設図書館であり、古川さんが今まで取り組まれてきた図書館活動は民間ベースとはいえ公共的な要素が強い図書館であり、現在取り組まれている土佐町での図書館活動も町立ということで公共的な割合が大きいということです。ここで「公共」という場合、確かに財源の問題は大きいのですが、もう一つには蔵書の問題もあります。

僕たちの図書館は山村で自宅を開き、自分たちの蔵書を「お裾分け」として貸し出しています。「お裾分け」という考え方は、市場原理一辺倒の都市生活の中で疲れた僕たちを癒してくれました。僕たちは都市の交換原理ではなく、山村に息づくある種の贈与の原理を図書館に込めたともいえます。そういう意味では、極めて私的な公共的振る舞いだとも言えます。蔵書に関しても自分たちが置いておきたい本だからこそ、内容は思いきり偏ってもよい。結果的にその偏りが、僕たちの自己開示になり、来館してくれる方が安心し

て滞在できたり、僕たちと対話をすることができる材料になっているようです。

僕たちは意図的に図書館を「私設」として限定することで、市場原理の侵入を防ぎ、より長いスパンで世界や社会を構想することを取り戻したいと考えました。しかし、例えば家庭文庫活動の先駆けであった石井桃子が半世紀前にすでに述べているように、一私設図書館（家庭文庫）は脆弱であるとも言えます。

（前略）私たちは、これほどの小規模の文庫の活動でも、だいじにして、これをひろめなくてはならないのだなと、家庭文庫研究会の人たちと話しあったのでした。しかし、私設の図書室は、たいへん力のよわいものです。（中略）
では、どうしたらいいかといえば、公共的な図書館―市や町や村で運営し、税金でまかなわれる図書館―の児童部を育ててゆくほかはないと思います[3]。

税金でまかなわれる図書館への不信感から始まったルチャ・リブロ活動は、むしろ「私設の図書室の脆弱性」にヒントがあると思いながら、それを言葉にしている最中です。今後とも古川さんが中心となって進められている土佐の山村での図書館づくりと情報交換をしながら、公共を問い直す社会実験を行なっていきたいと考えています。

1「取材１　大阪府立国際児童文学館廃止により我々は何を失うのか―大阪の歴史と文化論の立場から」『おおさかの街』ホームページ
（http://www.mmjp.or.jp/machi/69tokushu1.html　最終閲覧 2023 年 9 月 11 日）
2 髙橋樹一郎『子ども文庫の 100 年　子どもと本をつなぐ人びと』（みすず書房、2018 年、234-236 頁。
3 石井桃子『新編　子どもの図書館』岩波書店、2015 年（原著は 1965 年）、189-190 頁